

平成13年度試験研究成果

区分	普及	題名	小麦新品種「ネバリゴシ」の期待生育量と栽培法		
〔要約〕 倒伏を避け、安定多収を確保するための穂数は平均で530本/m ² であり、このときの子実収量は平均で540kg/10aである。そのためには、播種量6kg/10aで適期に播種し、施肥窒素量は基肥を4~6kg/10a、融雪期追肥を2kg/10aとする。さらに、目標とする粉のタンパク含量にするため、減数分裂期から出穂期にかけて2kg/10aの窒素追肥を実施する。					
キーワード	ネバリゴシ	期待生育量	栽培法	園芸畑作部 県北農業研究所	野菜畑作研究室 やませ利用研究室

1. 背景とねらい

小麦新品種「ネバリゴシ」は平成13年2月に岩手県の奨励品種に編入され、平成13年産から一般栽培が開始されている。「ネバリゴシ」は、低アミロース含量で製めん適性が高く、食感は独特のシコシコ感があり、食味にも優れる。その特性を活かした新規用途品種として早急な定着・普及を図るため、「ネバリゴシ」の期待生育量及び栽培法について検討した。

2. 技術の内容

(1) 成熟期の期待生育量及び粉のタンパク含量 (図1、図4)

稈長	穂数	千粒重	子実収量	粉のタンパク含量
77~85 cm	530本/m ² (450~600)	35~38 g	540 kg/10a (480~600)	9.0%前後

(2) 栽培法

ア. 播種適期及び播種量 (図2~図4、表1)

播種適期	播種量
標播 { 県北部：9月20日頃 県中部：9月25日頃 県南部：10月5日頃 }	6 kg/10a を基本とするが、出芽の不安定な場所では8kg/10aを上限として播種量を増やす。

イ. 施肥法 (図4)

基肥	追肥
窒素成分で4~6kg/10aとする	窒素成分で融雪期に2kg/10a、減数分裂期から出穂期にかけて2kg/10a施用する。

注)リン酸、カリはナンブコムギに準ずる。

3. 指導上の留意事項

- (1) 播種様式はドリル播種を基本とする。
- (2) うどんこ病抵抗性は「やや弱」であるので、極端な厚播きは避け、基本防除を徹底する。

4. 技術の適応地帯

県下全域

5. 当該事項に係る試験研究課題

- (83)：「新形質品種の特性を活かした高位安定栽培技術の確立」
- (2000)：「低アミロース小麦系統「東北206号」の高品質安定多収栽培技術」

6. 参考文献・資料

- (1) 平成10~12年度 東北農業試験研究成績・計画概要集 - 畑作(冬作物) - 農林水産省東北農業試験場編
- (2) 平成12年度 試験研究成果「品種 小麦 製麺適性に優れる「東北206号」」

7. 試験成績の概要 (具体的なデータ)

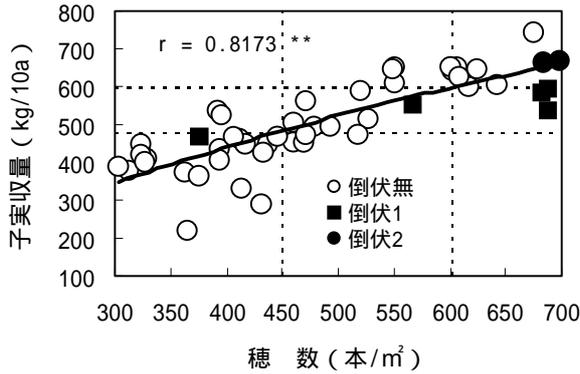


図1 穂数と子実収量の関係

(H9~12年播種 野菜畑作研究室、やませ利用研究室、東山町、花巻市、紫波町、玉山村)

穂数が650本/m²を越えると倒伏程度が増すことから、穂数の上限は安全をみて600本/m²に設定した。また、穂数450本/m²以下では収量が極端に低下する場合がある。

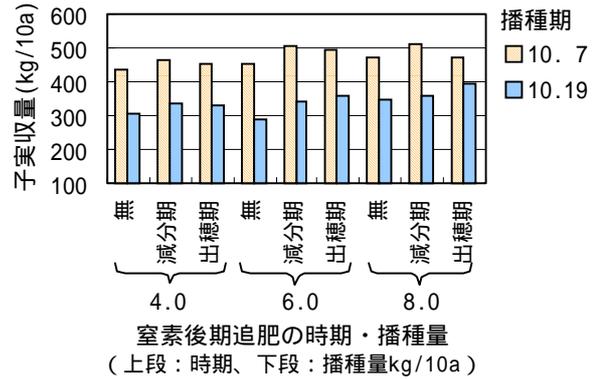


図2 播種量・窒素後期追肥の時期と子実収量の関係

(H10年播種 野菜畑作研究室)

注)各区とも基肥4、融雪期2kg/10aを窒素成分で施用。

標播に比較して、晩播では穂数が不足して収量が低くなる。また、減数分裂期、出穂期の後期追肥により収量は増加するが、標播には及ばない。

表1 播種量・追肥時期・量の違いによる穂数・倒伏程度の比較

播種量 kg/10a	追肥時期別 窒素施用量 kg/10a			穂数 本/m ²	倒伏 程度 0-5
	融雪	減分	出穂		
6.0	2.0	0.0	0.0	550	0
6.0	2.0	2.0	0.0	550	0
6.0	2.0	0.0	2.0	549	0
8.0	2.0	0.0	0.0	602	0
8.0	2.0	2.0	0.0	607	0
8.0	2.0	0.0	2.0	617	0
8.0	2.0	4.0	0.0	601	0
8.0	2.0	2.0	2.0	624	0
8.0	2.0	0.0	4.0	609	0
8.0	4.0	4.0	0.0	683	2
8.0	4.0	0.0	4.0	698	2
10.0	2.0	2.0	0.0	688	1
12.0	2.0	2.0	0.0	687	1
16.0	2.0	2.0	0.0	682	1

注) H11年播種 野菜畑作研究室

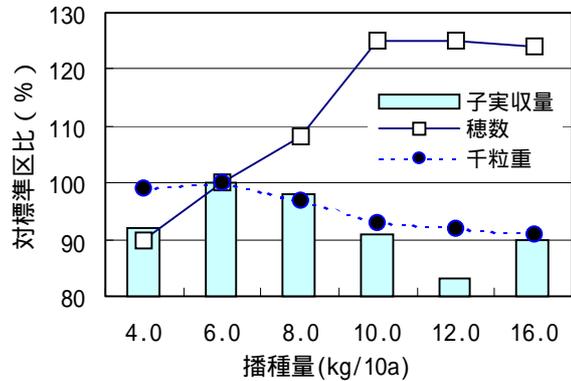


図3 播種量の違いによる子実収量・穂数・千粒重の比較 (H10~12年播種 野菜畑作研究室)

注)標準区は播種量6kg/10a。

播種量 10kg/10a までは播種量の増加に伴い穂数は増加するが、それ以上では頭打ちとなり倒伏もみられる。また、播種量が増えると千粒重は減少し、収量は低下する傾向にある。播種量8kg/10aでは、融雪期追肥を2から4kg/10aへと増量することにより穂数は増加するが、倒伏程度が増す。(表1、図3)

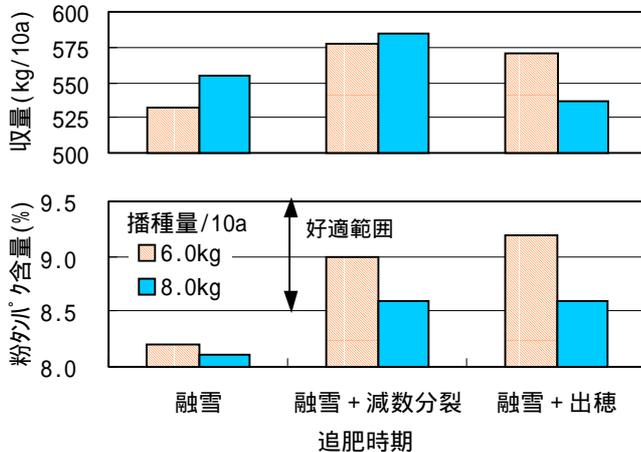


図4 窒素追肥時期と収量・粉のタンパク含量の関係

(H10~11年播種 野菜畑作研究室)

注) タンパクの分析は東北農業研究センター麦育種研究室による

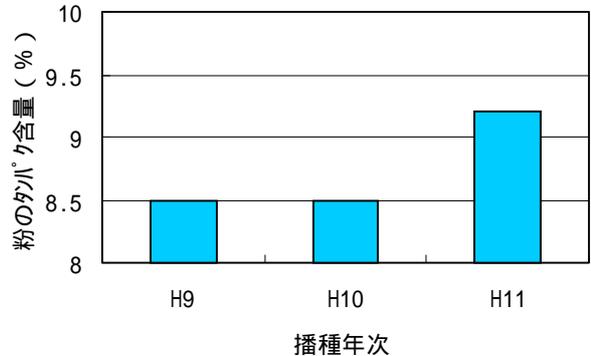


図5 県北部における粉のタンパク含量の年次別比較 (やませ利用研究室)

注1) 播種量: 8kg/10a、施肥窒素(基肥-融雪期-減数分裂期)=6-3-3 kg/10a

注2) タンパクの分析は東北農業研究センター麦育種研究室による